

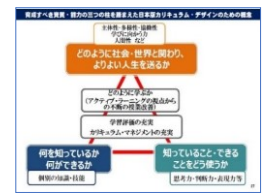
# 第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

## 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	東員町立神田小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	チームで取り組む「主体的・対話的で深い学び」の創造

### 1 研究の意義とねらい

現学習指導要領（小学校）が全面実施されてから3年が過ぎ、4年目に入った。この学習指導要領の中で、育成すべき資質・能力として、3つの柱が示された。①「学びに向かう力・人間性等」②「知識・技能」③「思考力・判断力・表現力等」である。そして、「どのように学ぶか」では、「主体的・対話的で深い学び」の視点での不断の授業改善が求められた。本校においても、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの日常的な授業改善をどのように推進していくと良いのかは、今も試行錯誤の中にあるが、本研究では、現時点での本校の授業づくりや授業改善の捉え方や進め方を整理検証し、成果や課題を明らかにして、今後の学校経営にいかしていきたいと考えた。



また、「主体的で対話的で深い学び」とは何かの捉えを明確にしなが、その実現に向けた授業実践を積み重ねていくことで、子ども達の学力に結びついていくことが期待できる。また、一人ひとりの子どもをしっかり理解把握し、愛情をかけていくことにもつながる。

### 2 研究の経過

#### (1) 学校教育目標と研修主題

右のような学校グランドデザインを構築し、どのようにして「主体的・対話的で深い学び」に迫っていくかを明示し、授業づくり研修を通して、教師の力量と授業づくりの精度を上げていくこととした。



#### (2) 「主体的対話的で深い学び」の基本的な考え方

本校では、令和3年度より「主体的・対話的で深い学び」を実現させるために「学びの共同体の理念」を参考に授業づくりを進めてきた。「学びの共同体の理念」を参考にした理由の一つは、学習指導要領にある「主体的」「対話的」「深い学び」と、学びの共同体で示されている3つの「学びが成立する要件」に深く結びついていると考えられるためである。

- 主体的→「ジャンプの学び」＝創造的・挑戦的な学び：どの子ども意欲を持って真剣に取り組むことのできる課題をつく
- 対話的→「聴き合う関係」＝学び合う関係：他者の意見を真剣に聴く姿勢、教材と真剣に向かい合う姿勢
- 深い学び→「真正の学び」＝教科の本質に即した学び：その教科でしか得られない学び（教科の本質）を授業に組み込む

#### (3) 研究の方法＜校内研修で取り組む授業改善の推進＞

集中期間を設けての研修も行っているが、研修の日常化の意識を持ってきた。それは、以下の研修の仕組み（方法）と教職員の主体性が醸成されつつあるからである。また、参観時の視点も毎回変わらず、3つの視点（①教科の本質に迫れたか？②課題は適切だったか？③温かく聞き合う集団は育まれているか？）で参観し、授業後の研修会での話し合いも同様の視点で行っている。

##### ①全体研修

年間3～4回、1つの学級の授業を全員で参観し、子どもの学びや指導のあり方を研究する。大学の先生や指導主事を招き、指導を仰ぐ。今後の授業づくりにいかすよう自分化する。

##### ②チャレンジ研修

チャレンジウィーク期間を数回設定し、自主的に授業を公開し、参観できる教師が授業を見て学び合う。

参観者は授業者に対し、気づきや学び、感想を伝える事としている。部会から1回は指導主事招聘を行い、助言をもらう。授業者に対し意見や感想を前向きな形で伝える。

### ③ふらっと参観

様々な学年・学級の授業での様子を観察し、教師の声掛けや子どもの様子を見る。たとえ5分でも、好きな時に好きな所へ参観しても良い。



### ④プチ研修

放課後等の時間に、授業づくりのことで困っている教師や、テーマを決めて学び合う等、強制ではなく、短時間で気軽にできる自主的な研修会をやっていこうという企画した。

### ⑤授業指導（改善）の機会づくりを企画

校内研修の他に、授業を観ていただき指導をしてもらう機会をつくっている。町の指導力向上指導員（元校長）は、月に2回程度、経験年数の浅い教員から中堅教員を中心に指導していただいている。また、経験年数の2・3年までの教員には、個人研修として指導主事を招聘し指導していただいている。

### ⑥公開授業発表会（R6, 1, 26）

3年間の研究の集大成の場として位置づけ、全学級公開授業を行い、50人ほどの他校の先生方に参加していただき、本校の研究に対してご意見を頂いた。



## （4）研究を通して分かってきたこと＜成果と課題＞

### ①観点1：「教科の本質を意識した授業づくり」では？

・その教科、単元でつきたい力を学習指導要領をベースにして考える。縦の繋がり、他教科との関連、実生活への広がり意識する。

＜成果＞「つきたい力は何か」を考える事で、教科の本質を捉えればよいことが分かってきた。

＜課題＞子どもの実態と具体的な指導法を絡ませて研究できると良かった。

### ②観点2：「学ぶ価値のある課題の提示」では？

・教科の本質を基盤にした、質の良い課題（ジャンプ課題）を設定する。

＜成果＞主体的に学ぶ子どもの姿が増えてきた。

＜課題＞子どもの実態に合った学習課題や授業展開にしていくことの難しさがある。

### ③観点3：「温かく聴き合う集団をつくる」では？

・学びを深める<sup>セブ</sup>7ルールをベースに、話し手の意図を汲み取るような温かい聴き方、聴いている子に分かりやすく話そうとする優しい話し方の定着をめざす。また、ペア活動、グループ活動を毎時間多用する。

＜成果＞子どもたちの聴き方、話し方、学び方がだんだんと身についてきた。

＜課題＞教師の力量の差によって、学級の聴き合う関係に差が出てしまっている。

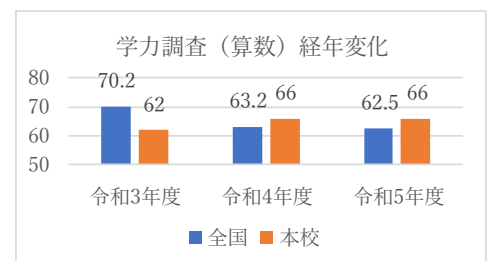
## 3 研究のまとめ

### （1）授業づくりの考え方が教職員に確立してきた。

「主体的・対話的で深い学び」の観点での授業改善を、本校なりの考え方で授業を創造し、教職員が積極的にチャレンジしている状況がある。特に「学習課題の設定」における質の良い課題を作るためには、学級の子どもたちの興味関心や理解度の把握、並びに教材研究や教科の本質を深く捉える必要があることを全職員が本研究を通して理解できた。また、1月26日の公開授業研究会に向けて、全職員が一丸となって授業づくりの研究・実践を日々積み上げてきたことは今後の授業実践にも活かされる。

### （2）学力向上につながってきた。

研修の日常化、不断の授業改善は、全国学調、みえスタ、IRT等の学力調査の結果にも表れてきた。本研究を始めた令和3年度の全国学調の結果は、全校平均より下まわっていたが、令和4年度及び5年度は全国平均より上回っている。不断の授業改善を実践してきたことに因るところが大きいかもしれないが、一方で、「聴き合う関係」つまり、学び合う集団を育成していくことに力を注いできたことも重要な要素となっていることを私たちは捉えている。



### （3）研修の重要性を認識した。

研修・研究を学校経営の柱にしていくことで、教師の授業づくり・集団づくりの指導力が向上していく。それは個人の研修ではなく、組織の研修としていくことで、学校力が向上していくことにつながり、子どもの育成に大きく影響していくことが分かった。今後も謙虚な姿勢で、全職員がベクトルを合わせて精進していきたいと考えている。